

## 野上豊一郎博士著作目録

著者	関 栄司
雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	17
ページ	155-174
発行年	1993-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00020441">http://hdl.handle.net/10114/00020441</a>

# 野上豊一郎博士著作目録

関 栄 司

## 「はじめに」

この目録は、編者が法政大学図書館に勤務していた昭和五十年頃に、当時の中村哲総長から「野上先生の著述目録のまとまったものがあるか」と質問され、それらしいものがないことに気づいて、自分で作ってみようと思ひ立ったものである。以後、勤務の合間を見ては、法政大学図書館にある資料を検索し、ないものは他の図書館や研究機関に赴いて調査し、少しずつ蓄積していった。図書館から広報部・企画室へと移ったのちに、この仕事は継続していた。

その間に、能楽関係については能楽研究所に資料がほとんど揃っていた関係で早くにまとめることができて、雑誌『法政』一九八〇年一月号に「野上豊一郎 能楽関係著作目録」と題して9頁にわたって掲載している。前年(昭和54年)十二月六、七日に法政大学が能楽研究所を中心に国際シンポジウム「世界の能」を開催した直後で、同誌同号はその報告を主体とする

能楽関係記事の特集に近い形になっている。その編集に当時広報部で雑誌の編集をしていた私も関与していた。

その後にも増補・訂正を重ねたが、平成四年三月末日に法政大学を定年退職したのを機に、一応のまとまりをつけることにし、同年九月付で本稿を書き上げて、コピーを能楽研究所にお届けしてあった。それが思いがけず『能楽研究』に掲載されることになった。表章所長を初め、能楽研究所の御好意に厚くお礼申しあげる。

年月をかけたにしては不備の点も少なくないと思われるが、本稿が野上豊一郎博士の業績の顕彰にいささかでも役立てば、編者の喜びはこれに過ぎるものがない。

なお、この目録作成にあたって、多くの研究機関・図書館・出版社等のお世話になり、また有益な御教示をも賜った。とくに能楽研究所の西野春雄教授からは、御協力と適切な御助言をいただいた。ともに記して厚く感謝申しあげる。

## 凡 例

▽この目録には、野上豊一郎博士の著作を、「一、著(編)書」

「二、雑誌掲載の論考・評論・随想等」「三、雑誌以外の出版物に掲載の論考・評論・随想等」「四、翻訳」「五、能楽関係の座談会」の五項に分けて列挙した。

▽同一の書名(または題名)の論考は、初出分(初版本や最初の掲載分)のみを掲出することを原則としたが、内容に改訂のあったものや、発行所の変更があったものについては、重複して掲出したものもある。ただし、著者没後の発行で、初出以外のものは省いた。

▽新聞掲載の文章、宣伝用パンフに寄せた紹介文・推薦文の類、著者校訂の英文テキスト、および著者の高等学校(旧制一高)入学以前に発表された文章は省いてある。座談会は、能楽関係のものに限って前記の「著作目録」掲載分を若干整理して転載した。

▽書名・題名、出版社名、掲載誌名などの文字は、発表された漢字・仮名遣いのままとしたが、印刷上の制約で旧字体の使用が困難な漢字は、新字体に代えた。

▽論文名は掲載誌の本文タイトルで採ったが、目次と異なっていたり、誤植と認められる文字を含んでいたりするものについては、適宜に取捨し、必要に応じて注記を添えてそのことに言及した。

▽一項にまとめることを原則とした継続座談会の出席者名が、その時々で違う名だったり、文字が異なったりしている場合があるが、それらは、併記したり、誤りと認められる分を省いたりして、適宜に処理した。

▽発行年月日は「月」までを記載したが、月に複数冊が刊行された雑誌については、「3/15」などの形で日をも記した。合併号は「3・4合」などの形で示した。

▽著作の収録には編者の現物確認を基本としたが、僅少の未確認分がある。それについてはタイトル上部に※印を付した。

▽著書の『草衣集』所収の随筆には、掲載誌名未記入のまま著者が文末に執筆年月を記しているものがある。それについては上部に☆印を付し、執筆年月を( )に囲んで加えた。

▽タイトル上部に\*印を付したのは、「鳩箭」「鳩箭子」のペンネームで発表されている分である。ペンネームについては、末尾の「補記(一)」を参照されたい。

▽単行本のうち、一点だけ初版の確認のできなかった『自治寮生活』は、「補記(一)」の末尾に紹介した渡辺澄子氏の文によって「M40・3」の発行としたが、編者の確認できたものは「M43・3」のものであった。

## 一、著(編)書

(書名)

(出版社)(発行年月)

※\*自治寮生活

本郷書院 M 40・3

巢鴨の女 「現代文藝叢書」第六編

春陽堂 M 45・1

近代文藝十二講 「思想・文藝講話叢書」3

〈共著・生田

長江、昇曙夢、森田草平〉

新潮社 T 10・8

花傳書〈世阿彌作・野上校訂〉「岩波文庫」

岩波書店 S 2・11

申樂談義〈世阿彌作・野上校訂〉

「岩波文庫」岩波書店 S 3・5

能 研究と發見

岩波書店 S 5・2

漱石のオセロ (夏目漱石先生評釋 OTHELLO)

鐵塔書院 S 5・5

蘭學事始〈杉田玄白著・野上校註〉

「岩波文庫」岩波書店 S 5・7

能作書・覺習條條・至花道書 〈世阿彌作・野上校訂〉

「岩波文庫」岩波書店 S 6・7

近代文藝十二講 (注) 「思想・文藝講話叢書」の改訂版

「新潮文庫」新潮社 S 8・9

能の再生

岩波書店 S 10・1

シー (G. B. SHAW) 「研究社英米文學評傳叢書」72

研究社 S 10・3

謡曲選集 (讀む能の本)

「岩波文庫」岩波書店 S 10・5

花傳書 (改訂版)

「岩波文庫」岩波書店 S 10・7

解註謡曲全集 (全六卷) 〈野上編〉

中央公論社 S 10・5 S 11・3

世阿彌と其の藝術思想 「日本精神叢書」21

文部省思想局 S 11・3

ギリシア文學研究〈共著・吳茂一、新關良三、山田珠樹〉

「新潮文庫」新潮社 S 11・4

能面 (全十回) 〈野上編〉

岩波書店 S 11・8 S 12・7

(注) 写真版百面、毎回「能面略解」を添付。最終回到「能面解説」を添付。「能面」は S 13・4 に特製帙入セット

で、また内容は同じであるが、「能面解説」の代わりに

“NOH MASKS CLASSIFICATION AND EXPLA-

NATION”を添付した海外版を S 13・9 に発行。

翻譯論—翻譯の理論と實際—

岩波書店 S 13・1

草衣集

相模書房 S 13・6

世阿彌元清

「創元選書」2 創元社 S 13・12

能の話

「岩波新書」(赤版) 62 岩波書店 S 15・4

世阿彌と其の藝術思想「日本精神叢書」18

文部省教學局 S 15・7

西洋見學

日本評論社 S 16・9

クレオパトラ エジプトの王たちと女王たち

丸岡出版社 S 16・12

能樂全書 (全六卷) 〈野上編〉 創元社

S 17・7 S 19・11

朝鮮・臺灣・海南諸港〈共著・野上彌生子〉

拓南社 S 17・8

能の幽玄と花

岩波書店 S 18・1

能 二百四十番—主題と構成—

丸岡出版社 S 18・10

能面論考

小山書店 S 19・7

太郎冠者行状

「日本叢書」61 生活社 S 21・5

謡曲鑑賞

目黒書店 S 21・6

シェバの女王

東京出版 S 22・4

大臣柱

能樂書林 S 22・8

能百句

能樂書林 S 22・8

花傳書研究

小山書店 S 23・7

エヂプトの驚異

要書房 S 23・11

寶生新自傳 〈野上編〉

能樂書林 S 24・2

觀阿彌清次

要書房 S 24・5

バーナーズ・ショー

東京堂 S 24・6

※ MOMENTS WITH MODERN GREAT WRITERS

尚文堂 1913

JAPANESE NOH PLAYS HOW TO SEE THEM

(TOURIST LIBRARY:2) BOARD OF TOURIST

INDUSTRY/JAPANESE GOVERNMENT

RAILWAYS 1934・9

MASKS OF JAPAN THE GIGAKU, BUGAKU AND

NOH MASKS

(注) 1937・11・7の帝室博物館での講演要旨。11頁。

KOKUSAI BUNKA SHINKOKAI 1937

NOH MASKS CLASSIFICATION AND

EXPLANATION IWANAMI PRESS 1938

THE NOH AND GREEK TRAGEDY

SENDAI INTERNATIONAL CULTURAL SOCIETY

1940・2

ZEAMI AND HIS THEORIES ON NOH

(TRANSLATED BY RYOZO MATSUMOTO)

松書店 1955

二、雑誌掲載の論考・評論・随想等

(誌名) (巻/号) (発行年月)

拔都大王露西亞蹂躪

「中學世界」 7/3 M 37・3

舷頭の少年士官

「中學世界」 7/6 M 37・5

巖頭 (詩)

「新潮」 1/2 M 37・6

片々録ヘッルゲ子一フ

「中學世界」 8/3 M 38・3

(注) 翻訳断片

詩人ポープ及び其の批評論

「中學世界」 8/9 M 38・7

文豪スキフト

「中學世界」 9/2 M 39・2

※最近學生界の思想概観

「中學世界」 9/4 M 39・3

※大學生の生活

「中學世界」 9/4 M 39・3

※自治寮生活

「中學世界」 9/5 M 39・4

※一高自治寮生活

「中學世界」 9/6 M 39・5

※一高自治寮生活(春の巻)

「中學世界」 9/7 M 39・6

わが最初のキス

「中學世界」 9/8 M 39・6

スチーヴンソンを論ず(一・二) 「帝國文學」

12/6 M 39・6

スチーヴンソンを論ず(三・四) 「帝國文學」 12/7 M 39・7

*一高自治寮生活(夏の巻)	「中學世界」	9 / 10	M 39・8	ミナ	「新文藝」	2	M 43・3
*明治文章變遷史	「中學世界」	9 / 15	M 39・11	河	「帝國文學」	16 / 4	M 43・4
*自治寮生活後日譚	「中學世界」	10 / 1	M 40・1	涼風	「ホトトギス」	13 / 7	M 43・4
革命詩人 シェレー	「中學世界」	10 / 2	M 40・2	椿	「ホトトギス」	13 / 9	M 43・5
(注) 目次の著者名「血川」は誤植				崖下の家	「新文藝」	5	M 43・6
革命詩人 シェレー(後篇)	「中學世界」	10 / 5	M 40・4	薄暮	「新小説」	15 / 6	M 43・6
(注) 目次には「シェレー」				死んだ仙三郎氏	「ホトトギス」	13 / 11	M 43・6
自然派觀	「ほととぎす」	11 / 1	M 40・10	海の音	「新文藝」	7	M 43・8
小説短評(十月)	「ほととぎす」	11 / 2	M 40・11	修善寺より(漱石氏病状記二)	(注)「病状記」は坂元雪鳥		
寫生文の妙所	「中學世界」	11 / 10	M 41・8	我等青年の行くべき道	「ホトトギス」	14 / 1	M 43・10
(注)「妙所」が目次では「妙趣」				土産話	「文章世界」	5 / 16	M 43・12
俳諧寺一茶	「中學世界」	11 / 11	M 41・9	黍の道	「新小説」	16 / 1	M 44・1
蘇國の郷土詩人	「中學世界」	11 / 13	M 41・10	或る夏の夜	「ホトトギス」	14 / 5	M 44・1
バンスの詩 (評釋)	「中學世界」	11 / 14	M 41・11	帝國劇場所感	「ホトトギス」	14 / 7	M 44・3
破甕	「ホトトギス」	12 / 4	M 42・1	文章は蜜柑の皮では無い	「文章世界」	6 / 8	M 44・6
石菖屋の婆さん	「ホトトギス」	12 / 5	M 42・2	着港前	「ホトトギス」	14 / 12	M 44・7
床屋	「ホトトギス」	12 / 6	M 42・3	干潮	「新小説」	16 / 7	M 44・7
少ジョン・ブル(英國學生氣質)	「中學世界」	12 / 6	M 42・5	一部分(去年の十月の日記より)			
英國學生氣質(『少ジョンブル』中より)				青鉛筆―十月の文藝―	「ホトトギス」	15 / 1	M 44・10
鶉飼	「ホトトギス」	12 / 12	M 42・9	青鉛筆―小説の都會的スタイル―	「ホトトギス」	15 / 2	M 44・11
槍と釣針	「ホトトギス」	13 / 1	M 42・10				
郊外	「新小説」	15 / 1	M 43・1				
竹 (II 京都)	「文章世界」	5 / 2	M 43・2	囚はれざる能評	「能樂」	9 / 12	M 44・12

青鉛筆―新年の文藝その他―	「ホトトギス」	15/5	M 45・2
病院の窓	「ホトトギス」	15/6	M 45・3
青鉛筆―二月の小説その他―	「ホトトギス」	15/6	M 45・3
モン・ペエル	「帝國文學」	18/3	M 45・3
浪漫主義者の群から	「新小説」	17/3	M 45・3
「春の目ざめ」を譯するに先だちて			
―謹直を粧ふ人々のために―	「モザイク」	2	M 45・6
與平君について	「ホトトギス」	15/10	M 45・7
青鉛筆	「ホトトギス」	15/11	T 1・8
土曜劇場を見た所感	「ホトトギス」	15/11	T 1・8
ソニア・コワレフスキの家出			
	「ホトトギス」	16/2	T 1・11
DÉBRIS	「秀才文壇」	13/2	T 2・2
見たき能と面白かりし能	「能樂」	11/4	T 2・4
(注) アンケート			
武者小路實篤論	「文章世界」	8/5	T 2・4
旅 (注) アンケート	「文章世界」	8/9	T 2・7
是界ノ是界ノ	「ホトトギス」	16/9	T 2・7
底	「ホトトギス」	16/10	T 2・8
※春の目ざめ(外國文學の研究)「秀才文壇」		13/?	T 2・10
「春の目ざめ」の英譯について「モザイク」		2/10	T 2・10
伊藤さんと私	「アララギ」	6/10	T 2・11
「ウォーレン夫人の職業」に就て			
	「ホトトギス」	17/4	T 3・1
藝その物の人格化(櫻間左陣論)	「能樂」	12/3	T 3・3
スケッチ	「能樂」	12/3	T 3・3
スケッチ	「能樂」	12/5	T 3・5
第二の戀	「新小説」	19/5	T 3・5
スケッチ	「能樂」	12/6	T 3・6
追分の高原(最も興味を惹ける旅の印象)	(注) アンケート		
本文は「…惹きし…」	「新潮」	21/1	T 3・7
趣味と好尚(注) アンケート	「文章世界」	9/9	T 3・8
スケッチ	「能樂」	12/8	T 3・8
スケッチ	「能樂」	12/9	T 3・9
新進作家と其作品(新人月旦―其四)(注) アンケート			
挿畫	「新潮」	21/3	T 3・9
挿畫	「能樂」	13/1	T 4・1
挿畫	「能樂」	13/2	T 4・2
近代超人の第一人者―シュテンダール―			
	「文章世界」	10/2	T 4・2
書齋に對する希望	「新潮」	22/3	T 4・3
(注) アンケート			
ロティと日本の女	「新潮」	22/6	T 4・6
木曜會の話(文壇回顧録の五)	「文章世界」	10/7	T 4・7
「炭焼の娘」を讀んで	「アララギ」	8/7	T 4・7
結婚の進化	「中央公論」	30/11	T 4・10
ドン・ファンと岩野泡鳴との對話「新潮」		23/4	T 4・10
(泡鳴氏夫妻の別居に對する文壇諸家の根本的批判)			

「あらくれ」の批評	「新潮」	23 / 4	T 4・10	實感的表現の価値——トルストイの技巧について——
バアナアド・シヨオの戀愛觀 (最新思想講話5)	「新潮」	23 / 5	T 4・11	「トルストイ研究」
2 / 6	T 6・6			
新春文壇の印象 (注) アンケート	「新潮」	24 / 2	T 5・2	寫生文家としての四方太氏
「新潮」	24 / 3	T 5・3		「ホトトギス」
20 / 10	T 6・7			
軍國主義とデングーイズム (最新思想講話7)	「新潮」	24 / 2	T 5・2	自ら守る人 (注) 阪本四方太
「新潮」	24 / 3	T 5・3		「ホトトギス」
20 / 10	T 6・7			
「赤い部屋」を読む	「新潮」	24 / 5	T 5・5	用語の正しい概念を定めてから
「新潮」	24 / 2	T 5・2		「新潮」
27 / 3	T 6・9			
婦人と文藝	「新潮」	24 / 5	T 5・5	(寫實主義と理想主義との問題)
「新潮」	24 / 3	T 5・3		傳統主義を排す
「新潮」	24 / 2	T 5・2		トルストイは笑はない人であった(トルストイの作品の印象2)
英吉利文壇の現状 (自由研究通信講座4)	「新潮」	24 / 5	T 5・5	(注) 目次は加藤朝鳥の「ハヂ・ムラアト」を読みと
「新潮」	24 / 2	T 5・2		著者名を入れ違う
「新潮」	24 / 3	T 5・3		「トルストイ研究」
2 / 11	T 6・11			
大學教授時代(談)	「新小説」	22 / 2	T 6・1	能樂の品位とは何であるか
「新小説」	22 / 2	T 6・1		「能樂」
16 / 1	T 7・1			
※夏目漱石先生に關する思ひ出の二、三	「黒潮」	T 6・2		能の寫實主義——梅若萬三郎の「景清」に就て——
「黒潮」	T 6・2			
新春文壇の印象 (注) アンケート	「新潮」	26 / 2	T 6・2	「能樂」
「新潮」	26 / 2	T 6・2		16 / 2
12 / 2	T 7・2			
夏目先生の表現	「文章世界」	36 / 9 (496)	T 6・2 / 1	自然と同化し得ざる悩み
「文章世界」	36 / 10 (497)	T 6・2 / 15		「トルストイ研究」
3 / 4	T 7・6			3 / 4
夏目先生と英文學(一)「英語青年」	36 / 11 (498)	T 6・3 / 1		「漱石俳句集」について
「英語青年」	36 / 11 (498)	T 6・3 / 1		「ホトトギス」
21 / 7	T 7・4			
夏目先生と英文學(二)「英語青年」	36 / 11 (498)	T 6・3 / 1		侏儒巨人——フランク・ヴェデキントに關する雜話——
「英語青年」	36 / 11 (498)	T 6・3 / 1		「文章世界」
13 / 6	T 7・6			
夏目先生と英文學(三)「英語青年」	36 / 11 (498)	T 6・3 / 1		「中央美術」
「英語青年」	36 / 11 (498)	T 6・3 / 1		4 / 6
T 7・6				
冷淡な寫實家(人の印象其三・徳田秋聲氏の印象)	「新潮」	26 / 4	T 6・4	漱石先生の繪
「新潮」	26 / 4	T 6・4		「民衆のため」といふ意味(最近の問題となれる民衆藝術及び其の論議に對する考察と批判)
「新潮」	26 / 5	T 6・5		「新潮」
28 / 6	T 7・6			
本統の文藝の害毒になる(チャーナリズムの是非)	「新潮」	26 / 5	T 6・5	彼はアイロニストか(人の印象二十一・生田長江氏の印象)
「新潮」	26 / 5	T 6・5		「新潮」
29 / 4	T 7・10			
自然居士(挿畫)	「ホトトギス」	20 / 8	T 6・5	人間であることが第一(人としての生活と藝術家としての
「ホトトギス」	20 / 8	T 6・5		生活との關係交渉に就ての考察)
「新潮」	29 / 5	T 7・11		「新潮」
トルストイの實感的表現(序論)	「トルストイ研究」	2 / 5	T 6・5	29 / 5
「トルストイ研究」	2 / 5	T 6・5		



ポビノが王様になった話  
灰色の小人  
自分を捨てることの必要  
— 翻譯の根本問題に關する一つの注意 —  
能樂は如何に芝居化されて居るか「能樂」  
— 歌舞伎座の山伏攝待を見て —  
能と芝居の問題  
能でなし芝居でなし（芝居としての船辨慶／市村座に於ける  
梅幸吉右衛門）  
（注）「の」は本文で題名に欠落  
猫を殺した話  
☆湖水めぐり  
残念な事が一つ（故岩野泡鳴氏に對する思ひ出）  
夏目先生の畫について—漱石遺墨展覽會の印象—  
「新潮」  
32／6 T 9・6  
「中央公論」  
35／12 T 9・11  
性は無人格である—シオの性<sup>セックス</sup>に關する意見—  
（注）「シオ」は「シヨオ」の誤植。目次には「性は無人格な  
り（シヨオの性慾觀）」とある 「新小説」 26／1 T 10・1  
假面と顔面—能樂についての一考察—  
「中央公論」  
36／4 T 10・4  
能樂と狂言  
「解放」  
3／4 T 10・4  
消え失せた像  
「金春」  
1／5 T 10・5  
スケッチ  
「金春」  
1／5 T 10・5  
「金春」  
1／5 T 10・5

[illegible]

表現の日本的なるもの—能の関位について—

「思想」 85 S 4・6

能の遊狂精神 「社會學雜誌」 65 S 4・9

世阿彌の花 「中央公論」 45/8 S 5・8

文學として見たる能 (一) 「信濃教育」 533 S 6・3

文學として見たる能 (承前) 「信濃教育」 534 S 6・4

(注) 昭和五年八月の三日間、屋代中学に於て埴科教育

部会の為に講習されたものの筆記

合唱歌の非戯曲的性質—能とギリシア劇との比較—

「思想」 114 S 6・11

翻譯と能 「英文學研究」 12/1 S 7・1

Bernard Shaw 書目 「英文學誌」 1 S 7・1

映畫と能と日本的なるものと 「思想」 117 S 7・2

能と敬老思想—能の前シテの老翁について—

「思想」 123 S 7・8

北輕井澤挿話 「鐵塔」 1/1 S 7・10

直面的問題 「謠曲界」 37/1 S 8・1

THE QUINTESSENCE OF BERNARD SHAW

(石田憲次著「バーナード・ショオ真髓」 「英文學研究」 13/1 S 8・2

哲學的・預言者的・諧謔者—バーナード・ショアの

表現本質 「改造」 15/4 S 8・4

なぜ金春を?なぜ「巴」を? 「金春」 2/4 S 8・4

幽霊の舞臺的表現—能の幽霊についての考察—

「文學」 1/2 S 8・5

かみがた五題 「經濟往來」 8/5 S 8・5

☆桂離宮 (S 8・5)

☆奈良二題 (S 8・5)

法政大學と僕の問題 「中央公論」 49/2 S 9・2

能の場面區分法—謠曲の戯曲的讀み方— 「國語國文」 4/3 S 9・3

謠曲車屋本考 「文學」 2/4 S 9・4

能樂改造論者 池内如翠翁 「謠曲界」 38/6 S 9・6

能樂と演劇 「金春」 3/7 S 9・7

(注) 朝日講堂に於ける「金春普及會」(S 9.6.20)の講演大意

舞臺藝術の寫實主義と様式化—能の扮装様式のことから—

「演劇學」 3/2 S 9・7

B. SHAW の近業 (“TOO TRUE TO BE GOOD,

VILLAGE WOOLING AND ON THE ROCKS.”)

「英文學研究」 14/3 S 9・7

坪内博士のシェークスピア改訂 (坪内逍遙譯『新修シェーク

スピヤ全集』) 「英文學研究」 14/3 S 9・7

謠曲の原典批判—「車屋本考」續稿— 「文學」 2/8 S 9・8

能の自由精神と形式主義—主としてその扮装について—

「日本精神文化」 1/7 S 9・8

能と狂言の接合—間狂言の發達についての考察—

「日本精神文化」 1/8 S 9・9

面の下	「観世」	5 / 9	S 9・9
假面劇としての能 (注) 學術講話会の講演の一節	「謠曲界」	40 / 1	S 10・1
「幽花亭隨筆」を讀んで	「観世」	6 / 1	S 10・1
STERNE ʌ BUTLER	「英文學研究」	15 / 1	S 10・1
(岡倉由三郎著 “STERNE” と戸川秋骨著 “BUTLER”)			
こかしこ	「英文學研究」	15 / 2	S 10・5
漱石先生のことども	「學苑」	2 / 6	S 10・6
(注) 現代文学教材研究会講話大意			
☆木曾斷片		(S 10・6)	
英文學者夏目先生の片貌	「思想」	162	S 10・11
☆福岡斷片		(S 10・11)	
狂言舞謠集を見て	「謠曲界」	42 / 2	S 11・2
(注) アンケート			
寺田さんと北輕井澤と淺間山	「思想」	166	S 11・3
☆北信早春譜		(S 11・3)	
空中滑走をしてゐる能—謠曲の流行と能の衰頽—	「謠曲界」	42 / 4	S 11・4
世阿彌の花	「文學」	4 / 4	S 11・4
三日月—觀世家本面の一(重要美術品)—	「観世」	7 / 4	S 11・4
(注) 目次は「觀世流本面」			
小牛尉—觀世家本面の二(美術重要品)—	(注) 目次は「觀世」	7 / 5	S 11・5
世家本面(小牛尉)	「観世」		
英文學の感覺(土居光知著「英文學の感覺」)			
☆麥			
☆生活の朝			
天神 赤鶴作—觀世流本面の三(重要美術品)— (注) 目次は	「觀世」	7 / 7	S 11・7
「觀世宗家本面(天神)」	「思想」	170	S 11・7
能面創作の主題的動機(上)	「思想」	171	S 11・8
能面創作の主題的動機(下)	「観世」	7 / 8	S 11・8
橋姫 夜叉作—觀世流本面の四(重要美術品)— (注) 目次は			
「觀世家本面(橋姫)」		(S 11・8)	
☆木曾のかけはし			
學生謠曲コンクールを斯う見る	「観世」	7 / 11	S 11・11
扶餘	「思想」	175	S 11・12
能の構成と近代的傾向	「文學」	5 / 2	S 12・2
金剛山膝栗毛—ドラマティス・ペルソネ—	「中央公論」	52 / 2	S 12・2
扶餘の遺蹟	「思想」	177	S 12・2
漱石と STERNE	「英文學研究」	17 / 1	S 12・2
(注) 仙台、日本英文学会(S11・5・31)での講演大意			
こかしこ	「英文學研究」	17 / 1	S 12・2
佛國寺	「學鑑」	41 / 3	S 12・3
三木清著「時代と道德」	「作品」	8 / 3	S 12・3
(注) アンケート(タイトルはない)			
☆平壤		(S 12・3)	
漱石の句—思ひ出—	「俳句研究」	4 / 4	S 12・4

杉田玄白とその周囲の人たち	「文學研究」19	S 12・5
澁川六蔵のこと	「文學」5/6	S 12・6
「帝國藝術院」能樂界の人選について	(注) アンケート	
※漱石先生の背骨	「謠曲界」45/1	S 12・7
序文(『私の能舞臺』誌上出版記念會)	「世代」	S 12・8
朝鮮の女—一つのクロッキー—	「謠曲界」45/2	S 12・8
慶州斷片	「思想」183	S 12・8
祕苑(京城)	「思想」184	S 12・9
☆雅樂	「ホトトギス」41/1	S 12・10
半島の旋律	(S 12・10)	
高砂	「文學」5/11	S 12・11
標題の問題	「思想」187	S 12・12
古代作家と近代作家—「書物合戦」製作の真相—	「文藝春秋」16/2	S 13・2
能の幽玄	「岩波月報」3/25	S 13・2
蛸山先生の散歩	「文學」6/3	S 13・3
日本文學の海外進出—翻譯合理化の提案—	「中央公論」53/4	S 13・4
幼友達	「日本評論」13/7	S 13・6
能・狂言の笑	「金春」7/4	S 13・7
「通小町」の姥の問題	「文學」6/8	S 13・8
鷗外の翻譯的功績	「觀世」9/8	S 13・8
	「圖書」3/32	S 13・9
能とギリシア劇	「思想」197	S 13・10
音と聲	「幸潮」3	S 13・11
「世界文學」としての日本文學	「圖書」3/35	S 13・12
(注) 東京中央放送局での放送講演(S13・9・20)		
ここかしこ	「英文學研究」19/1	S 14・2
海外だより	「金春」8/2	S 14・3
動亂雜記	「中央公論」55/1	S 15・1
避難行(「動亂雜記」續稿)	「中央公論」55/2	S 15・2
プラトーン劇	「圖書」5/49	S 15・2
パリの鼓	「幸潮」6	S 15・4
伎樂面・セザンヌ・ルノア—	「文學」8/5	S 15・5
人類最初の個人—エヂプト王イクフナテンの宗教革命—	「改造」22/12	S 15・7
オベリスク考	「思想」218	S 15・7
オベリスク出埃及記—「オベリスク考」續稿		
T. S. ELIOT'S "THE FAMILY REUNION"	「思想」219	S 15・8
聖 <sup>サン</sup> ロヨラの寺	「英文學研究」20/2	S 15・8
闘牛	「日本評論」15/8	S 15・8
ハルツの旅	「日本評論」15/9	S 15・9
能勢朝次著「世阿彌十六部集評譯上」	「日本評論」15/10	S 15・10
プハロスとロドス—世界七不思議の二つ—	「圖書」5/57	S 15・10

西洋の能面(一)	「文藝春秋」	19/8	S 16・8
オランダ	「文學」	9/7	S 16・7
パルテノン幻想	「觀世」	12/6	S 16・6
西洋の能面(二)	「日本評論」	16/5	S 16・5
七重文化の都市カイロ	「日本評論」	16/6	S 16・6
西の能面(一)	「觀世」	12/6	S 16・6
シエイクスピアの郷里	「日本評論」	16/4	S 16・4
ラメセス二世 附セティ一世	「時代」	17	S 16・5
パリの地下牢	「日本評論」	16/5	S 16・5
能の女面	「日本評論」	16/3	S 16・3
「處女の木」とアブ・サルガの教會	「思想」	226	S 16・3
吹雪のアプス—ユングフラウ登山—	「日本評論」	16/2	S 16・2
ローマ文化發祥の地—パナティーノの丘—	(注) パナティーノ	56/2	S 16・2
女王クレオパトラ(六)(九)	「中央公論」	56/1	S 16・1
女王クレオパトラ(一)(五)	「中央公論」	52/1	S 16・1
期待される「話し直し」の形式 (注) アンケート	「謠曲界」	52/1	S 16・1
伊豫の松山	「新風土」	4/1	S 16・1
南歐の美觀—エトナ山、タオルミナ、カタニア—	「日本評論」	16/1	S 16・1
ヴェルダン	「日本評論」	15/12	S 15・12
キフホイザー	「文學」	8/11	S 15・11
「日本評論」	15/11	S 15・11	
西洋の能面(三)	「觀世」	12/9	S 16・9
西洋の能面(四)	「觀世」	12/10	S 16・10
ワキの舞臺的存在理由	「謠曲界」	53/4	S 16・10
西洋の能面(五)	「觀世」	13/1	S 17・1
シェバの女王	「中央公論」	57/1	S 17・1
王ソロモンとシェバの女王	「中央公論」	51/2	S 17・2
吉野の能面	「觀世」	13/2	S 17・2
吉野の能面(續)	「觀世」	13/3	S 17・3
民族藝術としての能樂	「謠曲界」	54/3	S 17・3
「花傳書」—解説と批判—	「文藝」	10/9	S 17・9
能作者 世阿彌元清	「文學」	10/11	S 17・11
パレンシア(スペイン)	「澁柿」	345	S 18・1
蠅とり親爺(スペイン)	「澁柿」	346	S 18・2
ソモシエラ(スペイン)	「澁柿」	347	S 18・3
ランスの微笑の天使(フランス)	「澁柿」	349	S 18・5
ヴェルサイユの小村(フランス)	「澁柿」	350	S 18・6
薪ノ能—野外演能の音響効果と薪の火の照明效果、等—	「謠曲界」	56/6	S 18・6
表紙(畫)	「謠曲界」	58/1	S 19・1
表紙(畫)	「謠曲界」	58/2	S 19・2
表紙(畫)	「謠曲界」	58/3	S 19・3
能の喜劇精神	「文學」	12/9	S 19・9
能の構想の合理性と非合理性	「文藝」	2/3	S 20・3
※十二使徒	「九州文學」	78	S 20・10

使徒瞥見	「文學研究」	35	S 21・3	大學講師時代の夏目先生 (注)「新小説」(T 6・1)に
次第考	「文學」	14 / 6	S 21・6	「大學教授時代」として発表したものの再録
ゲッセマネの小童	「藝林閒歩」	9	S 21・12	「漱石全集」月報第九號 漱石全集刊行會 S 3・11
パウロと奴隸	「世界」	12	S 21・12	漱石先生と謠
名實論	「文藝春秋」	25 / 2	S 22・3	「漱石全集」月報第十五號 漱石全集刊行會 S 4・5
狂言の諷刺と諧謔	「文學」	15 / 8	S 22・8	南山松竹圖
花(隨筆 一言言)	「朝日評論」	3 / 1	S 23・1	「漱石全集」月報第十八號 漱石全集刊行會 S 4・8
舞臺藝術(日本文化の世界的水準)	「人民戰線」	19・20 合	S 23・3	シェイクスピアの戯曲
初心論	「觀世」	16 / 1	S 24・9	「世界文學講座」第三卷 英吉利文學篇上 新潮社 S 5・3
泣聲を立てる石像	「心」	2 / 9	S 24・9	「世界文學講座」第三卷 英吉利文學篇上 新潮社 S 5・3
能面「喝食」について	「心」	2 / 10	S 24・10	「聖デョウン」に就いて
三、著書、雜誌以外に発表したもの(新聞を除く)				「近代劇全集」第三十九卷 英吉利篇 第一書房 S 5・12
大學教授時代(談)	「文豪夏目漱石」	春陽堂	T 10・4	「アンドロクロロスと獅子」及び「運命の人」に就いて
(注)「新小説」(T 6・1)に発表したものの再録				「近代劇全集」第三十九卷 英吉利篇 第一書房 S 5・12
ワキ流存在價值の問題				希臘神話傳説
「謠曲講座」第一期第十三輯 謠曲講習會			T 15・6	「世界文學講座」第二卷 上代文學篇 新潮社 S 6・4
『虞美人草』の頃				希臘の詩
「漱石全集」月報 第二號 漱石全集刊行會			S 3・4	「世界文學講座」第二卷 上代文學篇 新潮社 S 6・4
ギリシア啓蒙運動				希臘文學の英吉利文學に及ぼせる影響
「岩波講座 世界思潮」第五冊 岩波書店			S 3・7	「世界文學講座」第二卷 上代文學篇 新潮社 S 6・4
日本語の表現の變化				能の舞臺的特質
「法政大學五十周年記念講演集」 法政大學			S 3・9	「岩波講座 日本文學」第五回配本 岩波書店 S 6・10
				西洋文學

- 「岩波講座 日本文學」第十一回配本 岩波書店 S 7・4  
 翻譯論 「岩波講座 世界文學」第一回配本 岩波書店 S 7・11  
 日本に於ける西洋思想移植史  
 「岩波講座 哲學」第十七回配本 岩波書店 S 8・7  
 西洋文學者の見た日本  
 「岩波講座 世界文學」第八回配本 岩波書店 S 8・7  
 能はいかに見るべきか―能に馴れない人のために―  
 「新文藝思想講座」第二卷 文藝春秋社 S 8・11  
 漱石のシェークスピア批判 『新修シェークスピア全集』別冊  
 「沙翁復興」第四回配本附録 中央公論社 S 9・1  
 ギリシア悲劇論  
 「岩波講座 世界文學」第十四回配本 岩波書店 S 9・3  
 夏目漱石の文章  
 「日本現代文章講座」第八卷 鑑賞篇 厚生閣 S 9・5  
 にか、をか  
 「讀書と散歩―文學隨想―」帝國大學新聞社出版部 S 9・6  
 比較文學論  
 「岩波講座 世界文學」第十五回配本 岩波書店 S 9・6  
 ローレンス・スターンの『トリストラム・シャンディ』  
 「英語英文學講座」第十三回配本  
 英語英文學講座刊行會 S 9・6  
 英譯された謠曲 「英語英文學講座」第十六回配本  
 英語英文學講座刊行會 S 9・9  
 能の趣味と日本主義思想
- 「日本精神講座」第七卷 新潮社 S 9・9  
 「マクベス」の喜劇的救済  
 「沙翁復興」第十七回配本附録 中央公論社 S 10・2  
 面の下 「現代隨筆全集」第一卷 金星社 S 10・3  
 南山松竹圖 「現代隨筆全集」第一卷 金星社 S 10・3  
 漱石先生と謠 「現代隨筆全集」第一卷 金星社 S 10・3  
 逸話の謀計 「現代隨筆全集」第一卷 金星社 S 10・3  
 外來面と能面 「現代隨筆全集」第一卷 金星社 S 10・3  
 (注) 既発表のもの  
 漱石・「オセロー」・逍遙  
 「沙翁復興」第十九回配本附録 中央公論社 S 10・4  
 邯鄲男 「國語 特報」7 岩波書店 S 11・5  
 能と教育  
 「岩波講座 國語教育」第一回配本 岩波書店 S 11・10  
 謠曲總論  
 「日本趣味藝術叢書」の「謠曲藝術」篇 成美社 S 11・12  
 狂言と茶 「茶道全集」卷の十三 特殊研究篇 創元社 S 12・4  
 能樂と舞樂 「日本文化講座」第五輯  
 帝國教育會第七回世界教育會議日本事務局 S 12・6  
 序 (注) 松野奏風著「畫と文 私の能舞臺」の序文  
 「謠曲界」發行所 S 12・6  
 鈴木三重吉 「讀書の眼」帝國大學新聞社出版部 S 12・11  
 「隅田川」の能の子方の問題  
 「國語 特報」18 岩波書店 S 13・2

大學村の最初の十年 「北輕井澤大學村」 S 13・8

(注) 建設十周年の記念講演集。編集・発行は「法政大學内・山川眞吉」となっている

序 (注) 下島勲著「隨筆鐵齋 其他」所収の句集「薇」の序文

興文社 S 15・12

謠曲と狂言

「國語文化講座」第四卷 國語藝術篇 朝日新聞社 S 16・8

「尉面」考 「奈良叢記」 駁々堂書店 S 17・1

中世演劇

「演劇論」第二卷「日本演劇思潮」 河出書房 S 17・9

能樂研究の今昔 「能樂全書」第二卷月報 創元社 S 17・7

謠曲の構成 「能樂全書」第三卷 創元社 S 17・11

政宗の太鼓―江戸初期演能の一例― (注) 「T・N生」名義

「能樂全書」第三卷月報 創元社 S 17・11

能樂概説 「能樂全書」第一卷 創元社 S 18・3

能の假面 「能樂全書」第四卷 創元社 S 18・11

能の場面展開法 「能樂全書」第四卷 創元社 S 18・11

能と狂言 「能樂全書」第五卷 創元社 S 19・5

狂言の假面 「能樂全書」第五卷 創元社 S 19・5

明日の能 「能樂全書」第六卷月報 創元社 S 19・11

日水作面考 「八雲」第三輯 評論・隨筆篇 小山書店 S 19・7

花傳書研究序説 「絃説」第一輯 小山書店 S 22・12

解説 (注) 「日本古典全書」第七十六卷「謠曲集上」

朝日新聞社 S 24・11

カタリ考

「市河博士還曆祝賀論文集」第四輯 研究社 S 24・12

#### 四、翻訳

(書名・原著者名・誌名/出版社・巻/号・発行年月)

人の命 ゴーリキー 「帝國文學」 12/5 M 39・5

春の目ざめ フランク・ウェデキント 「モザイク」 3 M 45・7

春の目ざめ フランク・ウェデキント 「モザイク」 4 M 45・8

春の目ざめ フランク・ウェデキント 「モザイク」 7 M 45・11

醜い求婚者 フランク・ウェデキント 「モザイク」 10 T 2・2

邦譯 近代文學 〈小説と戯曲の翻譯集〉 尚文堂 T 2・3

(内容) 謎の女(オスカー・ワイルド)、氣味のわるい求婚者

(フランク・ウェデキント)、ベルサ(ギ・ド・モオパッサン)、マルセイユ歌(レオニダス・アンドレーエフ)、木乃伊の片足(テオフィル・ゴオティエー)、汗

父子(マキシム・ゴーリキー)、あひびき(イワン・ツルゲエネフ)、マダム・ピイルソン(アルフレッド・ド・ミュッセエ)、ねぼすけ(アントン・チェーホフ)、マリヤの手品師(アナトール・フランス)、七人の姫(モオリス・メエテルリンク)、母の愛(アウグス



ト・ストリントベルヒ)、彼はなぜ彼女の亭主にうそをついたか(バーナード・ショオ)

アラディンとパロミデス メエテルリンク

「詩歌」 3/4 T2・4

アラディンとパロミデス メエテルリンク

「詩歌」 3/5 T2・5

春の目ざめ(少年悲劇) フランク・ヴェデキント

東亞堂書房 T3・6

お菊さん(マダム・クリザンテエム) ピエル・ロテ

新潮社 T4・5

答のニコライ トルストイ

「トルストイ研究」 2/8 T6・8

結婚論 バーナード・ショオ

(注) タイトル・ページは「バーナード・ショオ氏の結婚と戀愛に關する常識的意見」

新潮社 T6・12

青い神 ダンサニイ 「ホトトギス」

24/4 T10・1

春の目ざめ(少年悲劇) フランク・ヴェデキント

岩波書店 T13・9

高慢と偏見(上巻) ジェーン・オースチン

(注) (下巻)は平田禿木の訳

『世界名作大観』英國篇第八卷 T15・8

マリ・バシユキルツェフの日記(上)

『世界名作大観』各國篇第十五卷 T15・12

ガリヴァの旅 スウィフト

『世界名作大観』各國篇第十一卷 S2・6

春の目ざめ ヴェデキント 『岩波文庫』 S2・8

マリ・バシユキルツェフの日記(下)

『世界名作大観』各國篇第十六卷 S3・2

克蘭フアド ギヤスケル

『世界名作大観』英國篇第九卷 S3・12

お菊さん(マダム・クリザンテエム) ピエル・ロテ

『岩波文庫』 S4・5

春の目ざめ ヴェデキント

『世界文學全集』第三十五卷 S4・11

聖ヂョウン(六場とエピログの年代記劇) バーナード・ショオ

『近代劇全集』第三十九卷 S5・12

聖女ヂョウン バアアアド・ショウ 『岩波文庫』 S7・8

改譯 春の目ざめ ヴェデキント 『岩波文庫』 S9・8

マクベス シェイクスピア 『岩波文庫』 S13・5

ガリヴァの航海(上) スウィフト 『岩波文庫』 S16・1

ガリヴァの航海(下) スウィフト 『岩波文庫』 S16・4

ロビンソン・クルーソー(一) デフォー

『岩波文庫』 S21・4

ロビンソン・クルーソー(二) デフォー

『岩波文庫』 S22・1

マリ・バシユキルツェフの日記 (十二〜十七歳)

學陽書房 S23・6

マリ・バシユキルツェフの日記 (十七〜二十一歳)

マリ・バシユキユルツェフの日記 へ二十一〜二十四歳 學陽書房 S 23・11

學陽書房 S 23・12

春の目ざめ〈少年悲劇〉 フランク・ヴェデキント

學陽書房 S 24・5

ロビンソン・クルーソー (三) デフォー

『岩波文庫』 S 24・8

ロビンソン・クルーソー (四) デフォー

『岩波文庫』 S 25・8

## 五、能楽関係座談会

能楽放談會記事 (第八回・第十一回・第十六回・第二十三回・第二十六回・第三十回)

「能楽」 10/8 (T 1・8) 10/12 (T 1・12)

11/4 (T 2・4) 11/12 (T 2・12)

12/3 (T 3・3) 12/8 (T 3・8)

(出席者) 芦野理學士・池内信嘉(如翠・誌主)・岡不崩・

河東碧梧桐・神津一紅・後藤鶏兒(工學士)・小早川精太

郎・坂元雪鳥・高濱虚子・竹田法學士・内藤鳴雪・野上

白川・野村袋川・中尾文次郎(清堂)・松根東洋城・松本

恭三・森本義臣・山崎樂堂・和田萬吉(曼子)・和田盛慈

(注) 出席者毎回不同、発言のない出席者もある

謡と能のかげぐち

磯部甲陽堂 T 7・4

(注) 「能楽」連載の〈放談會筆記〉を部分的にまとめた

もの (坂元雪鳥・神田石秋編) 世阿彌十六部集輪講會

『謡曲講座』三、九 T 15・8、S 2・2

十二 S 2・5

(出席者) 岩倉松石・齋藤香村・坂元雪鳥・佐成謙太郎・

野上白川・野々村蘆舟・山崎樂堂・和田曼子

夏目漱石研究〈作家研究座談會 (八)〉

「新潮」 32/4 S 10・4

(出席者) 徳田秋聲・野上豊一郎・和辻哲郎・内田百閒・湯

地孝・片岡良一・寶生新・中村武羅夫

能界時局を語る座談會

「謡曲界」 42/1 S 11・1

(出席者) 土岐善磨・野上豊一郎・山崎樂堂・石川欽一郎

世阿彌能樂論研究 (一) (十) 花傳書 (風姿花傳)

「文學」 4/3 (S 11・3) 4/4 (S 11・4)

4/5 (S 11・5) 4/7 (S 11・7)

4/9 (S 11・9) 4/11 (S 11・11)

5/3 (S 12・3) 5/6 (S 12・6)

5/7 (S 12・7) 5/11 (S 12・11)

(出席者) 安倍能成・小宮豊隆・金剛右京・笹野堅・新關良

三・西尾實・野上豊一郎・能勢朝次・和辻哲郎

(注) 金剛以外はほぼ常連

世阿彌能樂論研究 (十一) (二十一) 花鏡

「文學」 6/3 (S 13・3) 6/7 (S 13・7)

6/12 (S 13・12) 7/3 (S 14・3)

7/5 (S 14・5) 7/6 (S 14・6)  
 8/11 (S 15・11) 9/2 (S 16・2)  
 9/6 (S 16・6) 9/9 (S 16・9)  
 10/5 (S 17・5)

(出席者) 安倍能成・小宮豊隆・新關良三・西尾實・野上  
 豊一郎・能勢朝次・藤森朋夫・和辻哲郎

世阿彌能樂論研究(二十二) (二十三) 遊樂習道見風書

「文學」 10/11 (S 17・11) 11/3 (S 18・3)

(出席者) 安倍能成・笹野堅・新關良三・西尾實・野上豊一  
 郎・能勢朝次・藤森朋夫・和辻哲郎

世阿彌能樂論研究(二十四) (三十一) 申樂談儀

「文學」 11/10 (S 18・10) 11/11 (S 18・11)

12/6 (S 19・6) 12/8 (S 19・8)

12/10 (S 19・10) 12/12 (S 19・12)

13/1 (S 20・10) 14/6 (S 21・6)

(出席者) 安倍能成・新關良三・西尾實・野上豊一郎・能  
 勢朝次・和辻哲郎・藤森朋夫

能樂鑑賞の座談會 「謠曲界」 53/5 S 16・11

(出席者) 安倍能成・有島生馬・瀧井孝作・野上豊一郎・  
 野村万藏・松野奏風・三宅襄・丸岡明・丸岡大二

新作「奥の細道」合評座談會 「能樂」 1/2 S 19・7

(出席者) 高濱虚子・荻原井泉水・伊東月草・長谷川かな  
 女・野上豊一郎・野上彌生子・江島伊兵衛・丸岡明・三  
 宅襄・三宅藤九郎・野村万造・櫻間金太郎

## 補記

(一)ペンネームについて

著者は本名「野上豊一郎」以外に幾つかのペンネームを使用している。ここに収録したものは、発表誌ごとの違いを断わらなかったが、列記すると、「白川」「白川子」「T・N生」「久我美濃」「乃賀美」「野上豊」「鳩箭」「鳩箭子」などになる。

「白川」「白川子」については改めて注記しないが、それ以外について、若干付記しておく。

「T・N生」は、この目録では一ヵ所だけであるが、著者が編集した創元社版「能樂全書」第三巻の月報で、「政宗の太鼓——江戸初期演能の一例——」に使用している。

「久我美濃」は、布川角左衛門氏(著者と親しく、当時岩波書店におられた)に編者が直接お聞きしたところ、「野上先生はペンネームを幾つも使われており、昭和七年に発行された『岩波講座世界文學』の宣伝用パンフの文『天才の病癪』の筆者「久我美濃」は野上豊一郎である」と明言された。

「乃賀美」は、この目録に収録しなかった分に使用されているペンネームであるが、参考までに記すと、『中學世界』第五卷第九号(M35・7)の懸賞論文に、賞外佳作として、「現今の試験」豊後國臼杵町平清水/野上芳/乃賀美とある。

「野上豊」も、同誌の別号に、賞外の「詩」と「小説」で使

用している。

「鳩箭」と「鳩箭子」については、確証はないが、著者のペンネームである可能性が極めて高い。そう考えられる理由を列記しておく。

第一に、その発音（キューセン）が臼川と同じであること。

第二に、その名の見える雑誌は『中學世界』であるが、同誌は著者が中学時代からたびたび投稿し、論文・英文・詩等に幾つも入賞しており（編者が確認したものでも八篇あり、五篇が入賞している）、その後もしばらく寄稿した雑誌であること。

第三に、「鳩箭」は当時の旧制第一高等学校生の生活を紹介する文に使われており、「臼川」と使い分けているように考えられること。

第四に、その紹介文「一高自治寮生活」（鳩箭子名義）は必しも自叙伝ではなく、生活紹介文を主としたフィクションでありうるが、その中に次の一節があること。

：わがふる里は九州の東岸、都までは水陸三百里の片田舎……第五に、『中學世界』に初めて「自治寮生活」の秋の巻が掲載されたのは、第九巻第五号であるが、これは明治三十九年四月の発行であり、その文中に一高からの「入学許可」を左の形で紹介している。

貴下高等学校入學者選抜試験ニ依り左ノ通り入學ヲ許可セラレ候ニ付キ八月三十日限り入學金壹圓ヲ當該學校會計課ニ納付セラルベシ 若シ同日限り入學金ヲ納付セザルトキハ入學ノ許可ヲ取消スベシ

本通知以前既ニ他ノ文部省直轄諸學校ニ於テ入學ヲ許可セラレタル者ハ前項入學ノ許可ヲ無効トス

明治三十五年八月十一日

文部省専門學務局

これは、「文部省専門學務局」発行の公式な文面の転載と考えられるが、その発行日が「明治三十五年八月十一日」であり、著者が一高に入学したのが明治三十五年の九月であるのと符号していること。雑誌発行の四年前に自分あてに届いて手元にあった文書を、そのまま写したものに違いあるまい。

第六に、野上素一氏（御子息）にお尋ねしたところ、「それを否定する理由は見つかりませんね。そういう前後の事情から判断すると、そうである（鳩箭＝野上豊一郎）可能性はきわめて高いですね」と言われ、続けて「私が子供のころ住んでいた家には、父が鳩が好きだったので飼っていましたし、母（彌生子）も、鳩の出でくる話を作品に幾つか書いているはずです」と答えられた。野上彌生子の初期の作品に「鳩公の話」「彈生と呼んだ鳩」などがあることが、素一氏の発言を裏づけている。

以上の見地から、「鳩箭」「鳩箭子」のペンネームで発表されたものは、著者の著作に相違ないものと考え、この目録にも収めたが、念のためその分は上部に\*印を付した。

なお、渡辺澄子著「野上彌生子研究」に次のような一文があるので、参考のため引用しておく。

「豊一郎の処女出版と思われるものに『自治寮生活』という小型本がある。扉に『此書を明治三十五年秋 余と共に第一高

等学校西寮九番室に入寮したる同室者諸君に献ず』と書かれていて、寮の一年間の生活を軽快なタッチで描いている。なお序文によれば、明治三十九年春から『中学世界』に連載発表していたものを一本にまとめたものであるらしい。(中略)

『自治寮生活』は、明治四十年三月十日、本郷書店より刊行された。なお著者名は鳩箭子とあり、臼川と音を同じくする別号が用いられている。」

## (二) 著書の収録内容について

著者には書き下ろしの著述のほかに、既発表の論考・評論・随筆に改訂の手を加えてまとめたり、関連したものを集めて一冊の書物として刊行したものが多く、したがってその内容を明示することは、初出でなくても検索に便宜を与えると考えられるので、ここに追記しておく。ただし能楽関係のものは冒頭に記した雑誌『法政』7巻1号の「野上豊一郎 能楽関係著作目録」に掲載してあるので、それを参照されたい。

### 『翻譯論——翻譯の理論と實際』

(内容) 翻譯の理論、翻譯の態度、日本文學の翻譯、謠曲の翻譯について、菟蓐問答

### 『草衣集』

(内容) 金剛山膝栗毛、平壤、高勾麗の古墳、扶餘、慶州、佛國寺、祕苑、雅樂、南道雜歌 朝鮮の女—一つのクロッキ、桂離宮、奈良二題、湖水めぐり、北信早春譜、木曾斷片、木

曾のかけはし、北輕井澤挿話、福岡斷片、麥、生活の朝、九月一日

### 『西洋見學』

(内容) 七重文化の都市(カイロ)、處女の木とアブ・サルガ(カイロ)、ロードス、パルテノン(アクロポリス)、パラティノ(ローマ)、エトナ(シチリア)、シェイクスピアの郷里、ウォリクの城、レンブラントの國、パリの地下牢、ヴェルダン、吹雪のユンクフラウ(アルプス)、ハルツの旅、キフホイザー、ロヨラ、闘牛、大戦脱出記

### 『クレオパトラ——エジプトの王たちと女王たち』

(内容) 女王クレオパトラ、女王ハトシェプスト、王ラメセス二世、王イクワナトン

### 『朝鮮・臺灣・海南諸港』

(内容) 京城、祕苑、雅樂、南道雜歌、平壤、高勾麗の古墳、扶餘、慶州、佛國寺、金剛山、海南諸港

(注・この外に共著者野上彌生子の隨筆三篇)

### 『シェバの女王』

(内容) シェバの女王、王ソロモンの智慧、王ソロモンの後宮、十二使徒、ゲッセマネの小童、パウロと奴隸

### (三) 補遺 (本文158頁に追加)

IL DRAMMA NOH/ISTITUTO ITALIANO PER

IL MEDIO ED ESTRE MO ORIENTE ROMA 1940

(1993年2月補筆)